

1-1 『2012年度 学生センター白書』に寄せて

学生センター長 宮崎伸光

本書は、2012年度における学生センターの活動をとりまとめた報告書です。学生センターは、2008年度に前年度までの学生部を改組して学生生活全般にわたる支援任務を引継ぎましたので、5年目の活動報告になります。

2010年度末に発生した東日本大震災(2011年3月11日)の前後で世の中は大きく変わり、もはや後戻りはできない、とマスコミをはじめとして、さまざまところで語られています。確かに誰もが予知し得なかった大災害の影響は、本学の学生生活にも多方面に及びました。しかし、大震災をきっかけに表面に現れた変化も、その実は長く深く潜在していた変化に気づかず、意識しないまま時を過ごしてただけ、ということがあったようです。

たとえば、被災地関係者支援の一環として、奨学金や学生納付金に関する経済支援方策をいくつか用意しましたが、その制度設計や実施過程において、極めて長期間に及ぶ不況による深刻な経済社会状況の実態を改めて知り、適切な支援策の構築が喫緊の課題であることを痛感しました。

限られた原資をいかに適切に振り分けるか、種々の奨励金に手を付けてでも奨学資金として経済支援に回すべきではないか、などと議論を重ねました。しかしながら、個々の奨励奨学制度の沿革等に当たると、それぞれ変換には難しい課題がありました。とはいえ、種々の研究を重ねた結果、家計急変に対応した新しい給付型奨学金制度の創出に道をつけることができました。

被災地の悲惨な現状を目の当たりにした学生の中には、精神不安を抱える者も現れました。大震災から一定の時間がたつと、震災とは一見無関係な学生生活上のトラブルや

成績ないし進路等に関する悩み等が、複雑に絡む事態も現れてきました。身近な人の死傷を含む重大な事故や事件にどう向き合うか、当該学生に寄り添いつつ指導するには、学生相談室を中心に関係学部教職員との連携が必要となり、また奏功することも少なくありませんでした。

2012年度の学生生活において、おそらく最も大きな変化として注目を集めたことは、市ヶ谷校地における大学祭が、完全禁酒で実施されたことでしょうか。何年か続いた学生による酒類の自主規制を強化したにも拘わらず、前年度の大学祭において集団飲酒の果てに生命の危機にまで及ぶ事態や暴力事件が多発した苦い経験によるものでした。学友会は小委員会を設けて対策の検討に取り組み、完全禁酒や参加団体の責任・協力体制の構築に努め、それを8項目の条件にまとめ上げました。大学祭は、そうして実施されましたが、心ないマスコミがこの史上初の試みに結実した学生の努力を正当に評価しない報道をしたことはたいへん残念なことでした。ともあれ、近隣に暮らす家族連れや本学のOBを含めた高齢者などの来場者が明らかに増え、大学祭を楽しまれている様子は新たな大学祭のあり方を指し示す光景に見えました。

また、もはや本学の特長として多方面からの評価が定着しつつあるピア・サポート関連事業については、正課、正課外の垣根を越えて「学生による学生の支援」が普通のこととして、特定の事業を超えて根付きつつあり、今後も発展する方向にあります。

学生センターの教職員一同は、今後いっそう学生生活支援に努めて参ります。